

## 富山市、長慶寺の薩摩・松前・箱館より寄進の羅漢石像について

深井 甚三・\*高山 恭一

### On an Arahat Stone Image that was Contributed from Satsuma/ Matsumae/Hakodate in Chyokeiji of Toyama-shi

Jinzo FUKAI and Kyouichi TAKAYAMA

#### はじめに

富山市の長慶寺にある五百羅漢は、現在富山市の民俗民芸村に隣接している関係もあり、富山市を訪れる多くの観光客が参拝・観光に訪れる名所になっている。五百羅漢は、富山県外の人にも知られる名所となっているが、江戸期の貴重な石像仏として、宗教史・文化史のうえでも重要な富山市の文化財である。この羅漢造立は、寛政十年（一七九八）に富山町人黒牧屋善次郎が發起して寄進を呼びかけたものである。彼は羅漢石像を佐渡の石工にゆだねた。制作された羅漢像は、廻船により富山に運ばれたものである。このため五百羅漢は、俗に北前船が運んだ石像仏として知られているように、近世後期の日本海沿岸地域の商品経済展開や海運発達をも示す文化遺産である。また、石像美術品の招来という文化伝播の面でも貴重な資料といえる。

五百羅漢については、故館盛英夫氏がその寄進者の施主名簿を翻刻されている<sup>(1)</sup>。氏はこの施主名簿に記された松前や薩摩の人々の名前より、とりわけ蝦夷地松前の人物の名前が著名な漂流船長者丸を扱った廻船問屋と同一であることに注目された。このため氏は、一九九二年十一月三日に東岩瀬バイ船研究会主催により開催された「次郎吉・太三郎日本帰還一五〇周年記念フォーラム・異文化体験と日本の近代化」というシンポジウム（於東岩瀬公民館）の討論の場にて、この点の発言をされている。この討論のまとめを載せた『バイ船研究』四号（一九九四年刊）の刊行により、下に記した氏の発言を後に知った。

館森英夫 この地図をごらんになりますと、ここに松前、箱館というのがありますね。この松前から次郎吉、太三郎が行っているのですが、北海道へ行った時に、この松前の河内屋兵衛門の旅館に泊まっているのです。そして、捕虜か何かになって後帰ってきましたが、帰ってきてまたこの河内屋兵衛門の宿屋に泊まっています。そういう記録があるのです。この河内屋兵衛門という方は、呉羽山にある長慶寺の五百羅漢を三体寄附しているのです。

ところが、富山には河内屋兵衛門という方の家はないのです。ただ、富山市の蛸町に黒牧屋善次郎の別荘があったのですが、そこに多分河内屋が出入りしていたのではなかろうかというので、河内屋兵衛門という方が三体寄附されたのでなかろうかと思うのです。

つまり申し上げたいことは、岩瀬港と非常に関係の深い松前の箱館に河内屋兵衛門の旅館があるということは、岩瀬とかかわりがあったという一つの証拠になるということです。

上に河内屋兵衛門とあるのは、録音の状態が良くないために発生したと考えられる誤植であるが、もちろん近江屋忠右衛門のことである。

館盛氏が翻刻された施主名簿などにより、その後松前や薩摩から寄進された羅漢があることは、一部の人には知られていたのではないかと思う。筆者らは館盛氏がその羅漢を探して紹介されるものと考えていた。しかし、残念ながら氏はその後亡くなられ、氏がこの羅漢について直接紹介した文章を活字化されたことは聞いていない。

羅漢は現在の場所にもともとあったものではなく、また台座の文字に判読できないものが多いこと、それに五百体という多数の石仏から、松前と薩摩から寄進された羅漢を探すのは大変と思ひ、他の方と同様と考えるが、これまで調査するのを控えてきた。しかし、近年、富山売菓の蝦夷地から薩摩への昆布輸送に関して研究を進めた関係で、やはりこの寄進羅漢を探ることが必要になった。また、近年富山大学教育学部附属小学校では総合学習のために呉羽山を対象に選んでおり、中に五百羅漢を分担して調べる子供もいる。総合学習が本格的に教育現場に導入されると、呉羽山は近隣の小学校にとって格好の学習対象となるのではないかと考える。そこで五百羅漢の調査を実施したが、目的とする羅漢像を見いだすことができた。この寄進羅漢がどの羅漢像であるか具体的に示すことは、歴史研究面はもとより歴史教育の面でも重要である。このためこの羅漢像を本稿で紹介することにしたが、前出の薩摩と松前とされる寄進者についても、可能な限りであるが調べ、その寄進の背景についてもふれることに

\*高山恭一は一九九七年に富山大学教育学部を卒業し、現在は富山大学大学院人文科学研究科に在籍している。

した。このため寄進者名簿を所蔵する長慶寺さんで拝見させていただき、その元絵の画帳もともに写真撮影させていただいたので、あわせてこの画帳の関係部分も紹介したい。

### 一、施主名簿と画帳

長慶寺の五百羅漢は、その寄進者の名簿に加えて、羅漢の絵もあわせて残っている点で、非常に貴重な美術史・宗教史・地域史の資料といえる。このためはじめに、五百羅漢寄進者の施主名簿と五百羅漢の元絵となる画帳について簡単に記しておきたい。

施主の名簿は縦二五センチ・横一八・五センチの縦帳である。無記載の表紙に次ぐ丁から若干をまず写真に示す。写真1（論文末に掲載）は中央に「五百羅漢尊者」と題して、仏子を持つ僧も付して描いている。脇に表題を損なうように「五百羅」や五が記載されたのがいつかは不明であるが、本稿では、単に施主名簿と以下、本帳をよぶことにする。写真2に示したように、その裏には発起人の家山こと、黒牧屋善次郎が描かれている。次の丁の中央に「釈迦牟尼仏 施主 恵海叟」とあるが（写真3）、恵海は長慶寺の住職であり、先の僧の絵は彼の絵かもしれない。この記事に続いて、以下、十六羅漢の寄進者の名簿が記載されている。写真4にみるように、十六羅漢は黒牧屋が主として寄進したものであるが、他の富山町人も一部は寄進している。志甫屋新四郎・伊沢屋八兵衛が残り各一体を寄進している。このほか十代弟子の寄進の記事もあり、これは黒牧屋以外の寄進であった。

こうした十六羅漢・十代弟子の寄進のうえにたって、黒牧屋の五百羅漢造立の発願が行われたが、右寄進者の記載に続いて、寛政十年七月の願主家山名による「五百阿羅漢造立募縁之序」と長慶寺の署名印のある寄進料の記事を内容とする勸進文も記録されている。そして、以下、羅漢の名前と寄進者の名前が記載されることになるが、寄進者の名前は戒名を記したのも多い。

次に、画帳であるが、これも表題は無記載となっているので、本稿では単に画帳とよんでおきたい。画帳は縦二六・五センチ・横一九センチであり、一切、文章の記録はなく、五百羅漢の一体づつの元絵である。この絵は後に紹介することにした。

さて、本稿の主題である薩摩と松前の寄進者の、施主名簿の関係部分を取り上げたい。

薩摩の八幡屋宇兵衛については、その記事の前に五百羅漢造立の発起人である黒牧屋の記事があるので、これを併せて次に記す。もちろん、本来はタテ書きである。

第二百九十  
(朱書)  
シユエンカウ  
首燄光尊者

黒牧屋	
施主	善次郎
茶所賽銭	
春溪妙法信女	

第二百九十一  
(朱書)  
ヂダイキ

持大医尊者

第二百九十二

(朱書)  
ザフリツギヤウ

蔵律行尊者

車屋	
施主	清次
家山傳盛首座（傍線略す）	
黒牧屋	
茶所賽銭	善次郎
薩州	
施主	八幡屋 宇兵衛
先祖代々為菩提	

黒牧屋は右の二体を寄進しただけではなく、発起人として寛政十年春に十六羅漢を造立し、またその修復料と山林を寄付したことが寄進者名簿に記載されている。なお、問題となる薩摩の八幡屋であるが、残念ながら薩摩国のどこのどのような人か不明である。彼が寄進した年は未記載であるが、その前後の寄進年をみると、年が判明する二七五番の寄進と二八一番、飛んで三〇三番・三〇四番の寄進はいずれも文化三年であり、八幡屋の寄進も同年の可能性が高い。つまり、富山売薬が薩摩藩のために昆布を蝦夷地から薩摩へ運んだことが判明する天保期<sup>(2)</sup>よりも早い時期の寄進となる。そうすると、八幡屋の寄進は、直接にこの天保以降の薩摩組商人らの昆布輸送と関わりのないものといえる。しかし、薩摩と越中の交渉の関係からすると、やはり売薬のかかわりとなるが、黒牧屋は薩摩組に入っていたことなど知られていない。また、薩摩組の売薬商は、真宗を禁止していた薩摩藩を考慮して、真宗について顧客に話すことを御法度にしてきたことはよく知られており、宗教的な勸進話は避けていたはずである。にもかかわらず、このような寄進があったことは、売薬商の勧めによるか、越中の船頭の勧めによるものである。時期からして薩摩へ越中船が向かうことはあまり考えられず、前者の可能性が高いようであるが、いずれにしても今後検討しなければならない、重要な研究課題である。

次に松前とされる近江屋忠右衛門の記事には、その前後に近江屋文右衛門という人物の寄進もあるので一緒に次に記す。

第三百六十  
(朱書)  
ヂキフクトク  
直福德尊者

施主	
近江屋	
文右衛門	
未二月廿一日	
梅林貞香大姉	

(第三百六十一は略)	(略)
第三百六十二 (朱書) キケンソン (朱書) 喜見尊者	村井丁 施主 近江屋 忠右衛門 先祖代々 無縁法界
(第三百六十三は略)	(略)
第三百六十四 (朱書) ダイバチャウ 提婆長尊者	施主 近江屋 文右衛門 未二月廿八日 膽顔恵明大姉

寄進者名簿には、近江屋忠右衛門の住所記載はないが、その名前近江屋忠右衛門で富山にかかわりのある同名の人物は、館盛氏が判断されたように、松前の廻船問屋の近江屋しか適当な人物はいない。名簿には、脇書きに小さく「村井丁」となっているが、この村井町とはどこなのだろうか。富山はもちろん松前にも村井丁という町名はない。村井町がどこなのか地名辞典により調べてみると、角川書店の『角川日本地名大辞典別巻Ⅱ・日本地名総覧』（一九九〇年）等には、村井として次の地名が紹介されていた。

鹿沼市（近世、村井村）、松任市（近世、村井村）、松本市（近世、村井町村）、滋賀県朽木村（近世、村井村）、滋賀県日野町（近世、村井町）

以上によると、近世で村井を名乗る村も少ないが、町となると滋賀県日野町の村井町となる。松前は、中期まで近江商人が経済的に大きな力を持っていたことがよく知られているように、近江商人が多数進出して出店を出していた町である。出身地の国名を屋号とするのは別に珍しいことでもない。近江屋忠右衛門が村井丁として記載されているのは、あるいは同家の出身地で本家のある町ということで、この町名を記載したようにも考えられる。

近江屋がはじめ上田を名乗っていたことはすでに明らかにされており、長者丸を扱い、漂流した長者丸の船員が日本へ戻り、松前に立ち寄った際にも同家が宿を提供していた<sup>(3)</sup>。松前の廻船問屋の中でも同家は越中の廻船と縁の深いことがわかる。また、長者丸の所有者能登屋が当時所持していた別の廻船に栄久丸があるが、同船の天保八年「買仕切帳」<sup>(4)</sup>には次の記載がある。

買仕切

松前上田仕切

一、笹目三百四拾七本

目方

六千七百三拾六貫八百目

代、六百八拾七貫百八文

□金六八

百老兩ト

○ 三百八文（下略）

右に登場する松前の上田とは、長者丸が宿にした廻船問屋とみて間違いない。

さて、近江屋文右衛門は三六〇番と三六四番の二体の寄進を行っており、前記名簿が記しているようにともに未年二月の寄進であった。忠右衛門の寄進はその間の三六二番で、三六三番の寄進は大野屋庄右衛門で、「文政六年未九月晦日」の記載がある。三六三番は米屋清六寄進であるが、年月未記載である。なお、三六五番寄進の魚津、大久保氏母の場合は、「文政七甲申年壬八月十二日」の寄進となっており、右の未年とは文政六年と判断できる。

松前の廻船問屋には近江屋を名乗る文右衛門は知られないが、嘉永二年頃の「松前商人定宿帳」には、千島講の講元商人が記載されており、その箱館商人の中に近江屋文右衛門の名前をみる<sup>(5)</sup>。「千島講宿帳」には松前の項に廻船問屋として近江屋忠左衛門が載り、これは屋号記載から上田、近江屋忠右衛門家と間違いないとれさせている<sup>(6)</sup>。近江屋文右衛門であるが、同帳には廻船問屋・小宿・付船宿の項には記載されていない。彼がどのような職業であったか不明であるが、講元になるだけに有力商人であり、富山とのかかわりのある商人の可能性はある。

近江屋忠右衛門らが羅漢を寄進した文政六年とは、越中から北前船が蝦夷地へ向かうようになった時期である。江差の「間尺帳」<sup>(7)</sup>に初めて越中の廻船が登場するのが文化十三年のことである。次が文政五年で同年以降は毎年、越中の廻船が江差へ入津している。つまり、近江屋は越中から入り始めた北前船の船頭のもたらした勸進文（寄進者名簿の冒頭に記載されている）か、あるいは直接の発起人の誘いなどによって、寄進に応じたものであるが、これは信仰心だけではなく、越中が有力な取引先になるとの判断にたったものである。

なお、以上でみた寄進者名簿の羅漢について、画帳に描かれた元絵は、次節で紹介したい。

## 二、寄進された羅漢

羅漢はもともと現在地にあったのではなく、呉羽山の登り口から山頂へのジグザク道の脇にあり、山頂には大きな釈迦三尊石仏があったという。富山藩は明治初年に激しい廃仏毀釈を実施したが、やはりその関係で倒されたり、中に紛失してしまったものもあるという。その後、半ば埋もれたようになっていた羅漢を掘り出して、現在地へ移し、整備して祀ったという<sup>(8)</sup>。

右の経緯について記載した石碑が羅漢の前に設けられているので、この碑文を左に紹介する。

羅漢石像修復記

長慶五百羅漢ハ靈驗夙ニ顕レ闔閭ノ恭信篤シ遠ク尊体ヲ佐渡ヨリ五十年ノ長ニ亘ル相承ノ堅信ニ憑ル而モ風蝕雪害歳ト共ニ加リ或ハ毀損シ或ハ埋没ス有志深ク之ヲ慨キ

昭和二年九月相図リテ懇ニ発掘修覆シ漸ク旧ニ復ス固ニ  
永劫ノ美挙ト謂フベシ 仍チ之ガ記ヲ作ル

昭和三年一月 従四位勲三等医学博士 石川日出  
鶴丸撰

(以下、裏面)

記念碑筆者

辻尚村

石像修覆記念碑建設及祭典者

密田松太郎

浮田ウタ

常田ナヲ

志摩ゆき

石川國松

主唱者 小柴直矩

[ ]

石工 伊藤茂

石像修工 玉生平助

この碑文によると、昭和初年の段階には、破損したり、土中に埋没していたという。このため昭和二年に埋まった羅漢を発掘し、破損したものを修理した旨を記す。現在、五百羅漢は長慶寺の南側、呉羽山の斜面に整然と並べ祀られている。羅漢は七段に区分けして、その真ん中には幅約三メートルほどの通路が設けられている。また、各羅漢の間には石灯笼が配されている。

羅漢は、寄進者名簿に記載された勸進文に、次のように記載されている。

御影石本磨壹ツ石ニ而

羅漢座像御長 三尺三寸

羅漢立像御長 三尺七寸余

立像座像文字ほりト共ニ出来ニ而

一鉢施主金壹両ツツ

寄進羅漢は御影石で造り、本磨きで一つの石から造り、金一両の寄進料とするという。その像は、座像を三尺三寸、立像は三尺七寸余の大きさに定めている。

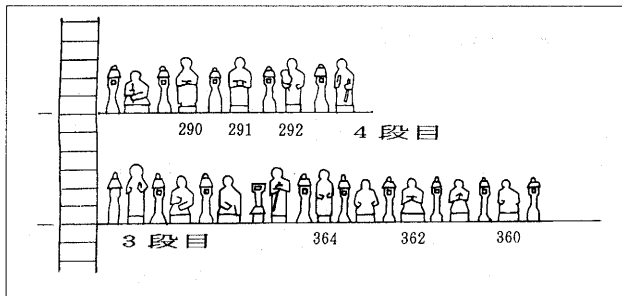


図1

さて、薩摩国の八幡屋宇兵衛が寄進した羅漢であるが、これは下から四段目の向かって右側に位置して設けられている。その場所は図1の通りである。通路から四番目に位置して設けられたこの羅漢像は写真5の羅漢である。その高さなど各部所の寸法は図2アに示した。この像は文化初年寄進であり、

当然ながら長期間経過したために文字が摩滅して読めなくなっている所も多い。しかしながら、その台座左側面は比較的保存状態が良く、図3アのように記載されており、寄進者名簿にもあるように、「施主 薩州 八幡屋宇兵衛」とあり、現在もはっきりとその文字が読みとれる(写真6)。反対の右側面には、やはり同名簿通りに「先祖代々」と彫られているが、施主名簿にある「為菩提」の文字は彫られていない。台石正面には羅漢の名前が刻まれている。

この蔵律行尊者などの羅漢名は、五百羅漢というものが考えだされてからつけられた架空の修行者の名前前で、その大部分は名称やその事跡は不明とされている<sup>(9)</sup>。画帳には写真7左の絵が描かれているが、羅漢像はこの元絵そのままでは

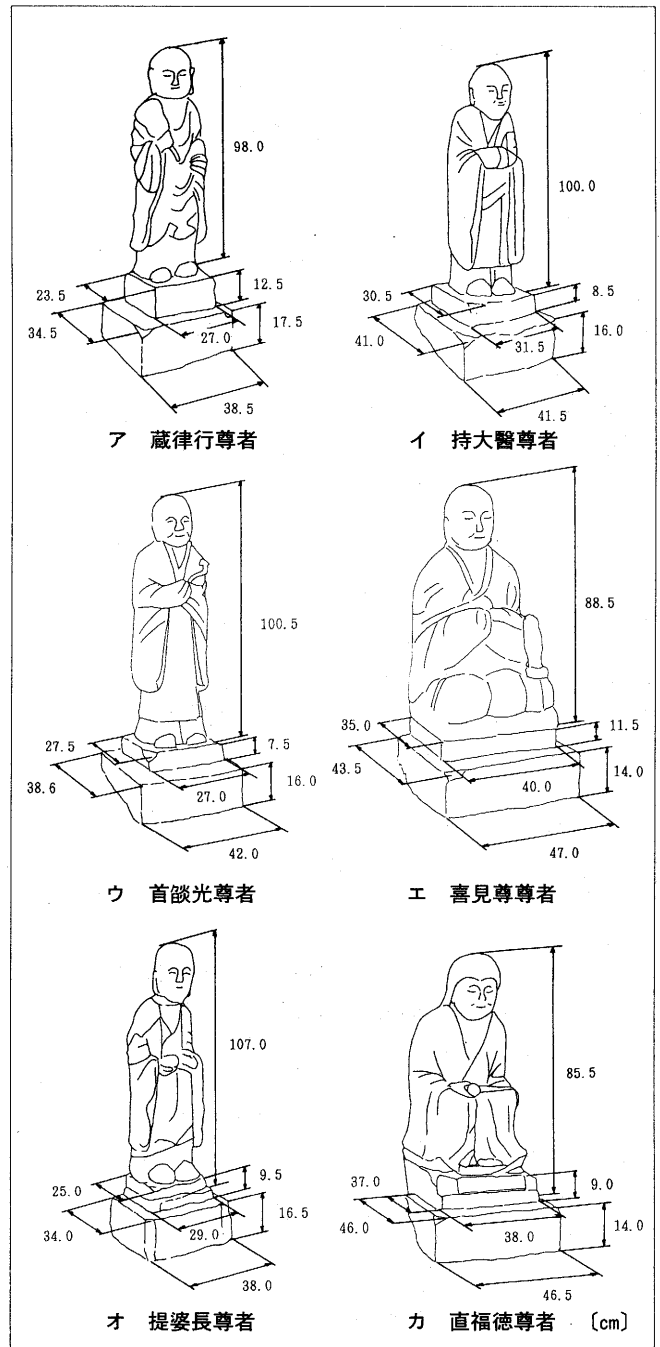


図2

ないものの、そのおおよその姿を表現して彫られており、この点は以下に取り上げる羅漢像にも共通する。

図1に示したように、八幡屋の羅漢の左隣に、紛失することなく、黒牧屋関係の寄進羅漢が二体安置されているので、あわせてこれも紹介しておく。まず、隣の寄進番号で二九一番の羅漢像は写真8の羅漢である。その高さなど各部所の寸法は図2イに示した。この像の台石正面は「持大医尊者」と彫られ、この台座左側面の一部は土の中に埋もれているが、比較的保存状態が良く、図3イのようにはっきり読み、寄進者名簿のように記されている。台座右側面は同名簿通りに「家山伝盛 首座」と彫られている。この持大医尊者の画帳の絵は写真7右である。

もう一体の羅漢は、寄進番号で二九〇番にあたるもので、写真9の羅漢である。これも図2ウに寸法を示した。台座の刻文は寄進名簿のように「茶所賽銭春溪妙法信女」と彫られている。左側面は「施主黒牧屋善治(郎)」と記されている。この羅漢の名前は台座正面に彫られているように首猷光尊者であるが、画帳には写真10の絵が描かれている。

続いて、近江屋忠右衛門寄進の羅漢(写真11)であるが、その刻文は図3エに示した。台座は二段になっており、下の台座左側の文字ははっきり読み、「施主 近江屋忠右衛門」とある。その正面は寄進者名簿に記載されたように、「先祖代々無縁法界」と刻まれている。右側面はなにもみえない。

また、上の台座正面には羅漢名の「喜見尊尊者」と記されている。この羅漢の元絵は写真12である。

次に三六四番の近江屋文右衛門の羅漢(写真13)であるが、これは台座の正面は番号以外が判読できない。その左側面は「施主 近江屋文右衛門」と記されているが、右側面は不明である。この羅漢元絵は写真14である。

近江屋文右衛門は三百六十の羅漢も寄進しており(写真15)、これは台座左側面に「施主 近江屋文」の文字が彫られているが(図3カ)、その後の右衛門は土の下に埋もれているとみられる。この羅漢元絵は写真16である。

### おわりに

寄進者名簿と羅漢像により、間違いなく薩摩から寄進が行われていたことが確認できる。しかし、八幡屋宇兵衛という人物が薩摩国のどこに居住し、どのような職業に従事していたか残念ながらわからない。文化初年に羅漢が寄進されており、天保以降の薩摩組関係者による薩摩への昆布輸送と関わりがない寄進と判断できるが、いずれにしてもこの時期に薩摩と越中の交渉が確認できることは重要である。しかし、売薬商の勧めにより寄進したものか、越中の廻船の船頭による勧めに応じて寄進されたものか不明であり、今後調べなければならない重要課題である。

また、羅漢を寄進した近江屋忠右衛門であるが、名前から松前の廻船問屋近江屋忠右衛門と同一人物であり、また名簿の村井丁の記載を手がかりに、近江日野出身の松前の廻船問屋と考えた。しかし、この近江屋は松前の廻船問屋と同一人物である可能性が極めて高いものの、残念ながらそのように確定できたわけではないことも断っておきたい。かつて高瀬重雄氏が長者丸につき松前で調査を実施したが、近江屋の子孫は不明であり、また『松前町史』をみても近江屋の子孫の家に残された文書の紹介などない。すでに近江屋のことを調べる手がかりがなくなってしまったようであるが、あきらめずに今後も調べていきたい。また、近江屋文右衛門についても、箱館の有力商人の可能性が非常に大きいものの、近江屋忠右衛門家との関係について明らかにできなかったわけではない。ともに断定がはばかれるものの、その点の配慮をすれば、近世後期における松前・箱館と越中・富山との交渉を知るための、歴史研究および歴史教育の資料・材料として利用が可能と考える。いずれにしても箱館の近江屋についても今後も検討してみたい。

なお、本稿では羅漢の写真その他写真・図版も多数掲載したので、研究に限らず教育面でも大いに活用していただければ幸いである。

### 注

1. 館盛編『長慶寺五百羅漢尊者施主名簿』一九九〇年・自費出版。なお、塩照夫『越中の街道と石仏』(北国出版社・一九八三年)は、「施主は台帳によると殆どが越中だが、

	台座左側面	台座正面	台座右側面
ア 第二九二 薩摩行尊者	字 八 施 兵 幡 薩 主 衛 屋 州	者 尊 行 傳 薩 二百九十三	★ 代 祖 先
イ 第二九一 持大医尊者	善 黒 清 車 施 次 牧 屋 治 屋 主	尊 大 持 者 醫 二百九十一	首 傳 家 座 盛 山
ウ 第二九〇 首猷光尊者	治 屋 黒 施 善 牧 主	者 尊 光 猷 首 二百九十	信 妙 賽 茶 女 法 溪 銭 所
エ 第三六二 喜見尊尊者		者 尊 喜 見	
オ 第三六四 提婆長尊者	忠 近 施 右 江 主 衛 屋 門	無 縁 先 祖 法 界 代 々 三百六十二	
カ 第三六〇 直福徳尊者	施 近 江 文 屋 主	三百六十	

図3

飛騨十、能登加賀五、江戸十、大阪二、薩摩、伯耆、尾張、佐渡、丹波各一の寄進があった」と記しており（二七六―二七八頁）、薩摩からの寄進についてはふれているものの、残念ながらそれ以上の記載はない。

2. 拙稿「富山売薬商の薩摩との昆布・抜け荷品輸送と廻船・飛脚」（地方史研究協議会編『情報と物流の日本史―地域間交流の視点から』雄山閣・一九九八年参照）。関連する論文として拙稿「幕末期、富山売薬商薩摩組の抜け荷取引の実態」（『日本歴史』五九七号・一九九七年）も参照。なお、文化初年から関係したか後考にまちたい。
- 3・6. 高瀬重雄『北前船長者丸の漂流』（清水書院・一九七四年）五章。
4. 富山市密田家文書。
5. 『松前町史』史料編三巻・一八六頁。
7. 関川家文書・江差市文化センター所蔵。なお拙編『近世越登賀資料』第二（桂書房・一九九七年刊）参照。

8. 伊藤曙覧「五百羅漢」『富山大百科辞典』富山新聞社・一九七六年・京田良志「長慶寺・五百羅漢」『富山大百科辞典』下巻・北日本新聞社・一九九四年、ほか。
9. 『総合仏教大辞典』法蔵館・一九八七年。

## 追記

本来ならば多くの富山県内の小中学校・高校の先生方や研究者に見ていただくために、大学の紀要以外の雑誌への投稿が望ましいのであろうが、できるだけ写真を多数掲載するために本誌に投稿した。

なお、本稿は、深井が薩摩・松前・箱館の商人寄進の羅漢石像を確認できたので、その後高山の協力で施主名簿の写真撮影や石仏の計測を実施し、本文を深井が執筆し、図を高山が作成したものである。

史料調査にあたって長慶寺さんに大変にお世話になったことを末筆ながら御礼申し上げたい。

写真1

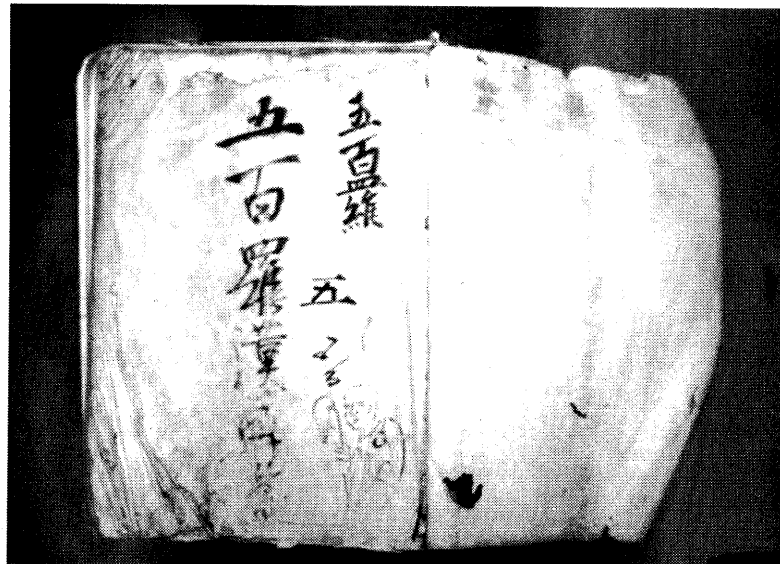


写真2



写真3

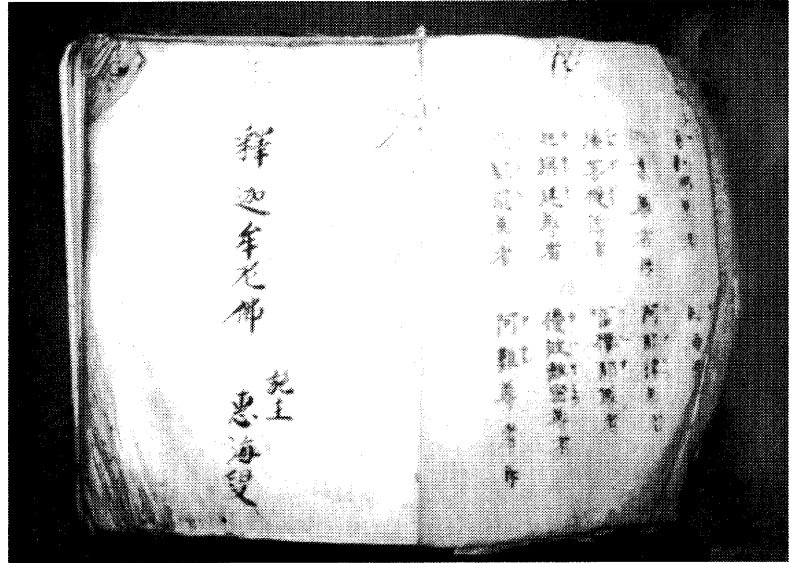


写真5

藏律行尊者（薩州八幡屋宇兵衛寄進）



写真4



写真6 藏律行尊者台座碑文



写真7  
藏律行尊者・持大醫尊者(図帳)

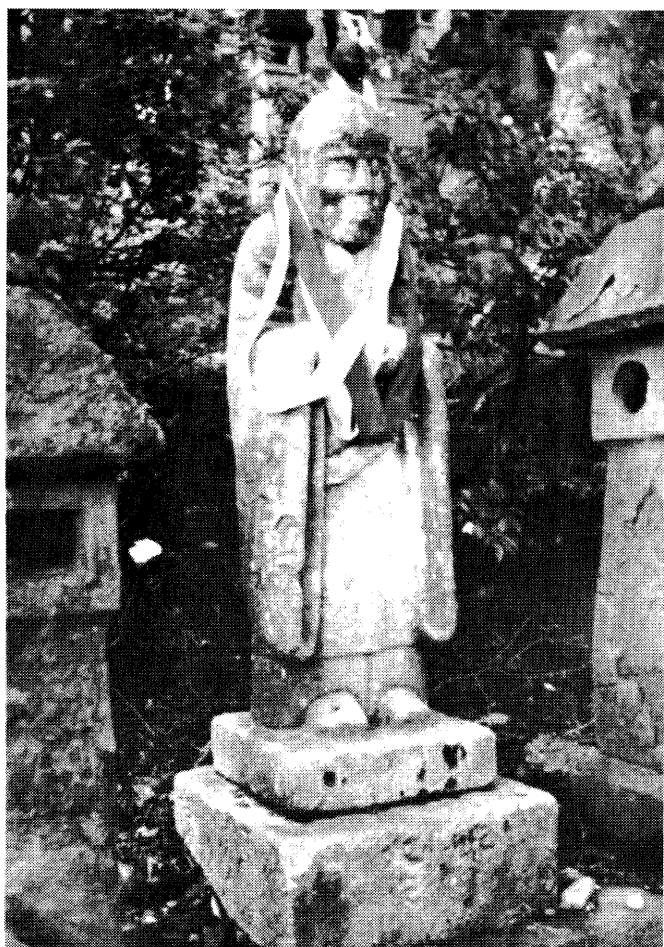


写真8 持大醫尊者(車屋清次・黒牧屋善次郎寄進)



写真9 首燄光尊者(黒牧屋善次郎寄進)



写真10 首級光尊者（図帳）



写真11 喜見尊尊者（近江屋忠右衛門寄進）



写真12 喜見尊尊者（図帳）



写真13 提婆長尊者（近江屋文右衛門寄進）



写真14 提婆長尊者（図帳）



写真15 直福德尊者（近江屋文右衛門寄進）



写真16 直福德尊者（図帳）